

演じることが 何より楽しい

す だ 須田 そより さん

北海道芸術高等学校ダンスコースに通う高校3年生。来年1月には倉本聰脚本の富良野GROUP公演「走る」に出演する須田そよりさんにお話を聞きました。



演劇を見て芝居の道へ

札幌に住んでいた小学4年の時に、母と一緒にやまびこ座の演劇を観に行きました。その時、お芝居がとても楽しいそうに思えて、すぐにやまびこ座に入りました。初舞台で主役を演じ、とてもうれしく思ったのと同時に、演じる事が楽しいと思えました。その後も稽古に一生懸命取り組んでいたのですが、5年の時に当別町に移住したのをきっかけに、一度演劇から離れました。

好きな芝居をやりたくて

当別に来てからは、ミニバス少年団に入団し、毎日練習に励み中学校でもバスケットを続けていましたが、1年目の中体連を目前に靱帯を切る大けがをしてしまいました。しばらくバスケットができなくなったのをきっかけに、やっぱり演劇がやりたいと思い、劇団ひまわり札幌俳優養成所に入りました。高校1年の時には、「オズの魔法使い」での主役を演じましたが、劇団ひまわりでの活動に刺激を持たず、自分のやりたいこととのギャップ

を感じるようになりました。脚本家になりたかった父が書いてくれた脚本を演じるため、自分が団長となって知友人を約30人を集め、「旅木演劇工房」を立ち上げました。今年の3月には札幌で2日間の公演を行い、延べ200人のお客さんに見ていただいた時はとてもうれしく思いました。

倉本聰脚本「走る」に出演

勉強のために演劇を観に行った時、倉本聰先生の脚本「走る」のオーディションの募集チラシが目にとまり、挑戦したいと思いました。応募用紙に意気込みを書いて提出した結果、書類選考をパスしてオーディションに進むことができました。「走る」はその場で走り続ける「その場走り」をしながらお芝居をする、体力勝負という面もあり、オーディションには、アスリート選手なども多くいました。オーディションは「その場走り」を繰り返し3時間も行うなど、アスリートの選手でも音を上げるほどでした。私は体力的な自信もありましたが、何より「このお芝居をやりたい」

という気持ちを誰よりも強く持っていました。



その場走りの実演

その結果、札幌オーディション最終選考の4人に残ることができ、両親が一番喜んでくれました。特に父は富良野塾が大好きですから。これから本格的な稽古が始まり、12月には合宿と、稽古付けの毎日となります。スローモーションや追い抜かれた感じの表現など難しい演技は、体力的にとっても辛いものです。この作品1本でプロサッカーの1試合に相当すると聞いています。1月から全国公演が始まりますので、それまでに一生懸命稽古をし、たくさんの方に観に来ていただくため、最後まで全力で走り続けたいと思います。

将来は劇団をつくり、舞台俳優として北海道で活躍したいと語ってくれました。(10月7日取材)